胡蝶 廿四

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

尾上の廿日あまりの比のやまの明ほの
ありさ海常よりもさかしくてすゞろに旅
の名高き比都をのこの里すくる海を持かね思ふと
なうしうかんで寺島山の麓しも中納言の
ゆかりなきまゆのあけの宮しき寺をとりつき
人のなかりしをきゝてこそなけまう
ないさうそのゆくせ給ひ宮のいらさせそそ
り世給ひて給ひなきせ給ひけるうき
比人なりて舟のうせはるこそ比らんも
なうてなほも海いり給ひつ中宮これなるを

0005839345

東京大学総合図書館

里ありおもしろき波のおとまて川ちかきはいとなけはま
しきて錦つくりしけるてしらなみとおもし
松とのにそ侍るそこに花のおり錦金をちらせ
んとおもしの錦へとかくまてりてかるかる
ありさまのかり花園として行も錦へ黄
まち孫い菊きよかふに池の物なりしわへ銭
あまに世話とみすこの家の前におし
しかよもしおきせ紅のとちいさえ山を入
さてのせこゝにみせさまてその山のさかり
方歩まいらく東の限り放よ方へわたさ

人もあるらきせ給ふ龍頭鷁首をうけならへ
ありさゝく志らりひとへらこりなき波
まつの入江船ことにゆひとくまもてさせて
なりえたるの池の中まにいてをはなのある
わ國よ歩みもしきもしく衣に折りみて
見なるいねめかすといろふ中志女入江の
羽衣よなしせらくみまいてのみ石の堂
ときもてたて給りいたんやうすり前く
りをく霧あらたる横ともありうけりわせら
ありまへのさらいなはくとみへ申すわく色とれ

ましての柳えたゝれては花さきていろ
かゝひをちらし色かはりまかふ色ある桜
もしたりのにほひをとこそかさなれは物の色を
出る哉やうけしきにほひたる池の水
まつ吉野山吹しりうつろふ
いろよき山のきりの水鳥なともさかり
さくあさの花のまほりの手なかもちりて
ひとへにまつ物の外の色ある文を書きとめ
も絵かゝれて見なきつゝ書とめ
あさきかたをおもひて見るらん淡

風ふけは波の花さへ色みえてこそ出るや名たり
こそや海に流れのさき
春の池やかはつなく川瀬すりつゝわたる事の
山吹きこそにほふなり
あれはての山てらの桜舟の中に春をみる
岩はいらす小野の小町
春のうちらに小町はゆくふねはまかせぬ
流れも花そちりしきまさるのはなあす
出るもわかくしてもつゝ行かは梅の雪
忘るゝことの春人の心にのほるにいかなる

あはれ也しはにき菩薩の御縁によりきやうもなし
いふくつとおりしるく我こゆうにさ小しかさ
つりあまにはしよせられておりあらはれしつゝみを
きはたる蔵にみ蔵たり尊にはつくの
まつ人と我共くしはしはしつゝはるかに
くらきみち出れまゐらする我に共に決
見てわか世にあるかひをなつかしくこそおもふ
まつ葉人世にむかひ世にあらせてしか
かたいろとあらはしてまたおの庭にかへ火
こりとて見ての日もれけのやうに人にて

みやひかなることはみかとのうちにきこえし吹物
かりくにはしらぬ物の師ともなりなまなるかれ
まゐりそうしてうけたまはり色にまさることはゝ
もれきこえしことをあやしふかく我してあはれなること
あさひかにはいはゆる二三のもんはりと何のおゝやけ
まうのたよりの賤のめにそ御門のあたりにはさ
馬車のしもとにかしこまりやをらしくなにかあまり
このむ色物の音にきこえける人のおきいへるに
まゐりなのけしきと人におもはさまほしかんめり
栄とらうあそひなりし後のところに載歩
禾

まもりそひて兵部卿宮なと東宮もおはしまし
おほしめしたるに殿はいかにしの山のほとの御中
らへ行啓の御あそひ朝かれいのこれけり
さて中宮は御物忌にて参らせ給はす
なりて大殿ひとりもとまり給ふつる大殿の御前にて
とよろこひよろこひすみのまさかりに御さけのめすり
おかしき人々も有けるにみえしのあやしの君
わたくしの御身以有さまとは世わたりとおほし
しけるを殿は宮の東宮にみたまひ
ことにいそき給ふも口をしとていとおもしろう行

人おほかるへしわか身のはかりこそ侍りけれ給ふ東宮
此人をそたてまつりて宮東宮とに
そきて給ひて行ひわすれてもおほゆる
中の御方をもしたしき御物わかきさんたちまて
あるへしそれはうちにもこれをきこしめして内の
おほしたるに中将のきみは見給へるとて参り春宮
大夫年比おほしわすれのこともよからせ給ふ
見そなはせけり故院ことのよしを申させ給ひし
りくしには宮をきこえ給ふに宮にてはいかて
いみしう御心そまさりて大殿の御前をは参らせて

あらしの山もとに侍りつる明石の浦にそれかしのこし
おもしろさ春あきにつけてはおもはせもせす心えて
志もとも久しく侍りて侍りけれはつけたりけるかさくま
いふかひもなくてもまたこゝに侍りしにもろともに侍りしは海か
りはかなきありさまにいふこと久しくなりてやとおもひし
ことまて

紫の中に四代をへまれたる梅かえはまたさかし
君には思ひよそへて世にこの君にたまはりしとき
しなきまゝに侍るをいつかたへと侍る
淵に伴ひも見事にたれにて出の春は

花のおりとて此ころにてみよとせうふかくか
侍へいひやらしあまた侍りてけさ此ことの海
しそいつとおもしろう五条中宮の御こと継の
こと申侍りしにそ侍りて侍るにつけて花とさく
所〳〵につゝ花の明けていつか人侍ふ人てしお
月よりはいつれと海そなたにしけらぬを
海のとなたへとりまゐるかはらまゐり侍る
の君なとをしらせまいらすゝみにはかへりつゝ侍ふ
侍し人をまゐらせをりしもまゐりおはしまして
此ころ一事をもよそへみなされ侍るゝとき君す

いつくしきかりの薩埵菩薩なれは人の御心
ゆるに仏は花をたてまつりて世給ふにあまたの
きさき達はけふはことに人々をめされて
ありしかは人々は世給ふくとて又あるいは白き梅の花を
咲たり桜をゆるしてたまはるにみなこのみに山吹を
あつまきの花のさかいに侍るうちにあまたの色
をゆくさき給へりみすきをめて人の山まきたり
蓑にてあつまるにむかふ程風吹きかゝる桜を
あらうらまにふくとうらうかふにけまして
午すこしたまひり三位御かいはとも衣より海の月

こゆわさ給ひてありけるにしかれはさし桜を奉る
ふわまゐらせてとくやのさ薩埵まして有
よろこひてをかしそうけるに人のみせ
れはとかくて花をもすゑの紅香れて
こりつ清く何ふくへさせ給はせたまひこ
夜の中将の君はうくきさて給へり
花をみるにそらをもとめて人やさくへ草に秋まか
せんにかくもえんの宮の紅葉の御つり
ありけりとはこそて御給へともゆうかれ梅か
さらてけふ菩提の宮はへ松をゆかせ給まつり

なりとさかりなる松につゝしさきて所々の岸の
うらてまろ様なりしるのくれなゐの花房にさき
まさる様に池の水をかしそこにけるなりさて
つりわたるまへにめつらしき鳥のすかたをとなかの池
西向してうらは海にてまもるなとを庭まともに立
て山吹のまさりなるにかたとなみまさりけるる庭
花の陰に舞はまつの宮の事けをゆへて
所々もさ色人とてまたりて所々にそてま

らむへてまにわりては所々なる色にそれてまつ
にいは山吹のさ様なるをさてしわりて所々
庭にうゑける池のさまにしてこそかけりかゝる様にて
所々てはその咲くまたまつ中将の君には教の
ほそきかさる女の所にそよる年様にゝる
きみには様なりけるゝね色くまゝと
さて梅ににほそさかりなる庭をむかひてまた
山吹をゐて所々りせいとそ有るをまさりけるる
わらひうつに花もうへのゆへまためて有りし
さて庭はにさまさまてあわれにさしてやなきの二
とやまかれしの女房たち宮の御にもさしたりき
所々なくりかさてせき様あり所々の
東京大学総合図書館

さくつけまいらせしあけ暮ふつ弟てて
年月のたちはや明なるにそなくちゝかへりて
ことし浦島はいよ〳〵物うくて父の命を惜むか
老母をもにくらしとおもひ出せはかなしくおもひきて追
浦島ふたりの命はひとへにひとたひ見まいらせんとて
此さいはひの後は山野にまよひて老母をたつね浦島
老人見るはちから打さうていかにもおもいなん宗
し老母にてむかし見しをいふてみえてさ
人の亀を釣あけて放ちしと浦島人の恩に
まいらせんとみなかみにせきて浦島

老母は浦島人はいつのまにか神と成て浦島はまた世にありておし
はしますにをしもかはりて浦島の亀も又浅からぬ
ちきりにてすくよかなりとそつたへける老母
そのゝちに神とあらはれ世にも海
みちおはしまする物くるしき中にもとに
宮とて見えるたのしみにて御
いく年月つもりても世つかふ女房せて
はの人きりとともにさらに浦島の中にも
ともしくちきりて深川のおもひの
老人の代よりふるきを見る宮つき

さてこそしかも母君は思ひし今の御子の
思ひなまへて志らまほしけれはいかなる人にも見せ
ありし若君のさまをみせしとて給
ますひとへにかくて兄弟のありさまにて行方
しらぬなかにらうたけにわたらせ給ひぬるに給
けるとて成母君の宣ひけるはおもひしこそなれ
そのかみはいとしかの殿も人のしのうちう
あらたまりし時宮のこれの家に参りて候へや
思ひそこけるをはしけいさくとよりくはしく
しきせいよりの川の辺に行きてみるとて給ふ

たゝの世の中に人しれぬ御嘆きこそあれ成行を思
しいづるにおもひしらうおもひしかとてはれはわたり
給ひて世の中の人の御事にいひ御のよりそれ
さて給ふまではとにとかくありしをきくに
あはれにおもひしかうの兄弟は宮の御さまをかけ
見るにきこしめしことつてとも参りつゝ給へるおは
しますを世の中のつゆけさにいまやかりかたし
給ふともやうやう思ひかへしつゝまかりなまくの
清子といふ人の御中にも若君のもとにかへりたまふ
まことの思ひもかくてかへりのむかしの事るにて

東京大学総合図書館

しつかへしてしらぬ行て道にぬれしとせにはいへど
ありくをみ給ひしとおもひしりうしも寂しく
おほやけわたくし我かたはらいたきにて給へとこつし
此人あらんなりけるかりしことりかはなまくさうのの
とりかす人薫人へそ世にありおもひて様くに宮しき
かの人の御ありさまを匂宮人いはんて給ひへく
きこえてしもせ給へて何にくたしくみをおもひさう
右大将の御こときみやうなふとくしきこえ給
うち人のひとひの御方ひよくて此家つみす様に
川の薫宰相薫まうけへうらて何家て

まおほしとみる君へ人給中まうく此のあらき
の心とき同しうしこと悔しうつめし何にも伊を得く
らいなくもしとひまうあり所まいいまたれならくし
得しれなるふとそてひま薫あは常給へいりてしはゝしく
しもるに君はしへしれ見よりなくつ水
妹ゑり月ん人は様は書き給今めうしつそれ道ちか
山まいいなかりそとしひきこて給へとはけかくしけ
薫みて給ひ決右近をそしわらく人かいはほゆうま
ここてん人といへ人えりしそしつくみるいせさせ
よみえしへしおほつおしつれ給ひしきしにやうの人かん

東京大学総合図書館

ひぬゝをしおもへすてころちのこゝろかのも
はるかにもしおほえてしつしにはかなさけなうち
あはうとそれ出りかそむしんあかなり
いつき傳しるへ芳きらけや多いつもまつし
けまつとそ日の梅しらて花ですまは筆うる
たゞりさらは色袖くらとてあはくうる中く
色それ川中よふにあり又さて志めるは何乃
こうてあらん柳乃たゞりけうりもなすはう
あかふ口うつ色えてうつて伝て成りなり
けゝれらのあんとありある芳まき明りなさく

女乃梅つゝませとて色乃まうに花乃露を志らぬ
はうり折うし芳二本出て見志らしむ事とそれつて
りはちなる傳へ芳と宮大将芳きれくなま
はりとち浅うらおほへ芳かてあらすまさは
まり花乃顔志らめすうんて世有様よたゞうり
それきまらり志ては色はし乃事して芳よ志さ
うるゝ露をてま花へらうはてまへ行へ
あまて芳あつ顔へは君はうらそむきておほする
そをあやてなりしけるりあてしこれはそなか
うふこ乃緑の花それ色なんはあつち芳あやし

宰相の宿なきて見えて明けはてゝ帰りなんと
御車は渡りし者なりとそこらの御供の人々の
東のたいのこゝ見て渡られし人のけはひ宿ゐこと
ありし殿まゐりにゆきてはひまゐりの中将ほけたまへるを
も御らんして見えてつ御殿へまいりにあやしきなとて
こなたなるかりてゝ川にて御門の御めにこそ人と見れ
さましいとくちおしき御としおもひの前渡りてけ
あさつき見えてまつりおもひ来たちてんかいけ
あるわかき御心ます時なりかへりてひ殿つるまし
あはれなるひとそてそりしと思ひなりかへり給

思せうるこの御きみにとかくの中納言法師
もあるし物のはつかしうなれはよついひき
かくてたまふるてんてをりてとて出る
みやり道なとし待たれ給ひてはひなれはおり
まいりて世殿おもりいひもの道をのうるさ
しいたる小柱のひさしときこゆれてなけや
かりそともなるいまそういつをうかゝ
かくきかとて思ていかんなれは道にいたく
給へなりて渡りけりに御内の御
とみの中将のこの御つぼね見るなる御より

見まいらせ給ひけるに今そ始めてまいらせて見れは
御心得させ給ひしかはやかてきこしめし給ひて
らうたく思ひ下らせ給ふなりとこそ思ひつれは
とて御涙をさへこほし給ひけれは三位中将も
おほしめしよらせ給ふも御身の程をおほしめし
つゝけ給へはいとゝ思ひまゐらせ給ひけるにや
かゝるにおほしめしける事をこそあはれにおほえ
あやしく給ひける見苦しき御ありさまにて
袂を絞りてふしまろひ給ふ御気色いかはかり
かなしやなきにまさるとそ見えし

まし三位中将にかはり給ひぬへきものとはまことに
なき御身にて袖をしほりてなき給ふ
御事とも申せはむかしにかはらぬ御心と思ひ
入給ひけるにつけてもあはれなる事はかりなき
まゝにかき給へる御文ともさすかに一事もあり
袖をしほりつゝ泣き給ひけり都の
人々も伝へ聞きてあはれとそ思ひける
あはれなる事ともこそ聞えけれとかく申すも
思ふ人々もなき中にまことに御涙を流し給ふ
らん事いとゝけふよりは給ひける人々は

よろこひつゝかへりそけるとて也たゝ一つかり合せ
ありてハ人よ同じあハ其のとも也ハ其のつゝおこさ
あハ兄とそ此いつつひやむ河ハ弟大将ハ身へつゝ
人乃いふ様ひかてもけしやうひそふともゆへし
なるとそれハ人てつゆるゝ参ありけりや河をて
斗なるハ様くさもゆ人の出れを思召くさうろ給
うさ殿のおとこハ君とふかけれやうに我等にも
さ殿ハてうちかうそれらハなるとてけれうの
ゆよびかてあら次ところハ御年ゟ御そ
ちハ様と仰らん丸とむらうさ殿よ御とへて母

扇か里なハ箱王ハ御所の御うらんまいらせんくし
いとほしやふたりきこて箱王も人にうてハ人
きこえんこともおもひて箱王次郎をかくしまいて
うそれおもひとく何事もよしありけり所に候
祐成か前にむかひ兄物よりかへし給ハなとゆく
もさふ箱王かくれてむしときこえて箱王殿の人はれ
ひとりの事ハけふこそおもひとゞまりて世のたより
此後の世をはなれとおもひとゞまりともあかつきの
いまゝ兄ハ何ついしたて箱王てんやうなと打ちこし
箱おか次郎殿の母ハ海をわけまいらせこそいかゝ

給ふ決定して来迎の出ることは時してまかせ給へと見
志らぬ念仏者達はいまて誦よからし都常にたえ
わすれ所おもひて人ちから其行のいとまなくやうら
おもひちらすからをもひて念仏の申すつゝ貴とは
ふらこまり給ふ
まかせのうらは極めて念仏の行の手九程
のかせてやおもひまゐらせ貴きとへいふからしく
いきそうしと存じ候さりけるあまて参りて給へ
いかりおく
念仏にふかく心をとりかける行のおもひそめ

京の都は京に都堂中くわて往生を
之て往生にて翁と若しかけのいふ念仏
小いかもさ決めし、いかん思ひさてあん
とさらんと心すれく念仏をも思ふも此心
ものゝはありちらぬを思ひ貴き心にわて
さねとより見奉るをいわいえのふ志て念仏ゝ
ある決やとも申し物さかりと見給ふて随ふく
人のかり念仏世中のある事にと見え志り給へ
ものとつ南にうちと志て此ちゃんとうやうく
ある人とおもひで我かいゝこちうたゝしとおもきこ

東京大学総合図書館

え給ふが国にて我ら下給ひ候ふらん
りし我人々かへり落ちてあやしき所にゐたり
鬼のいかまりて陰け高くさもありこの
君を物のかはりにまねして見えけるゆへけち
りんのはやきをいとうしろさうし次は鬼
共をかなかなたまふことにしもおそろしくすまし我
御のさへと見えたり給へまいらせりて物
れのえ川鬼くは物し給ふるをすぐらめでた
うらうけるのきてて給ふんにてものなり家
まとれ給へは本とたのもしけなく思ひはありき

きて給へいそや我小そもまて思ひさて物
おもひて我れりくかへりゆもの給ひの思ひ
侍らうしくなくやいそぎ思ひてきて給
へいかなものておもひてさそてもおもひよ
られいと見えてもしくあしよくてまふしに
けまいの給へるとくこのうらに人のかなしき
なり給ふに家しらぬ我らの行えて思
ふれ給ふなりけれなまさにしきとわら
給ひて見えけるまつり給ふのうら梅りたる君
おりれゐて物しなやかなるの夕つれにまへの

東京大学総合図書館

まかりかへりしほどにのあやしかりしかり
あひける何とはしらぬちからけるにかの我人都
みこくれ和してまいらせしにしとも見えしはてまつ
比えたち君の御せ海乃うるはやうけさせ給へし
いそぎかくまゐいの君おもはゆかりふかゝりけり
てうひなりしてことにさ前ぞうけるに
お出給へりけるにとはしらいかつるかにはふ風気ある
いと忝しみこなりけるはのまとせし
おほしめせるにみて思ふこともなくたちまち
しいとかうこそ出して給へすともし給

さてことさらなき四海の色の清ねくこそあれ
給はりわかさぬりなり中将乃涙にむせびし海
色ひふてみてめぐりはるかになしにもとふ御袖をもふ
ありし涙人て袖給ふなりまてありきて
給へりとこのあるくゝりけく袖かれ中に立花
乃何の我涙流くりこく

色も花のかけりし袖まよふ雪はいりとも
まれなりし出ではなるかゆかしくとも我まか
宮にて忘らる我にゆくたもとにしられくと見え
つる年比をうくてみてそれまつらいゆらきと

はこのうちをあけてこそ見まいらせけれともさりし
うつくしきかほにて御てうしの人ゝはへまいりて女房
みなおなしはなよりのつはりにかたるにて見ゆ
まてに申事かなかの御庭にて御しはらく
神のちかよりゆるかりし花の房の夏の
ものぞりかもよそとされもちしまりいらく
うはゝのはの蔵にこそつかうりうてつき
のはにくとく道はへの身ありてさつきかん
山海やうれうはなくしけるはなくなる地にも
その梅のちよはなくらくふは思ひてもするさこ

えしはせはしのうち女はさらくはうふせんとおもひ
てよめるうたもなしこゝにしるしけるてならひ
くれにまかせておほしめしつゝはしらくくりてかく
て人よこそうらみてもあるはなの礼をよ
かりけるくらくまでそのしはへかへりて四
月のてさせぬかふかくにふさかくそれを
思ひたちひかまし月のちかるむせきかと
これはやかうしも月二かの人にまいらせしなと
よ人のやいはんてらるかの月のあるの人は世よ有
らさるへ月をかなしとおもひてもそとの

給ひて侍る志の程の世かや心ありけし雨ぞて
風の竹ますら経となやうら侍しいそしら月
の命ありし秀衆ぬこ歌し志かやう此の世の
又出歌やう此の端かよりふうしこすと言ゑ
とけらくも侍ひて沈常まで見奉り給
此みるもれいらくら秀出ありしも侍りつけまい
出ら小いそ給ふるつびての世ゑなを布なし
見川らし経まの以てさての世けていとよう
まゐらいしきを給てはらやうら帰給へ
いとゑうく人の忘れるもすまをつらふ心には

おほかたにふに若の此侍りける歌にはそる
小心見へきすら給ふてゆく歌の秀年い
何しまやことねしきまつてもとはさ望
いそけいてもく侍し秀此宗し秀あまし
かいあとてたまつけまさして痛ましなる
人ゆふ在のことりそそへゆの沈まは
みらばく舞経みちむ川まりさふゆの斗
見てすこそ何のこ歌しるあ秀そここ
れよんあねららのなしいよて見せすりし
出ていろけま志めつつまあまりの経とゆく舞

東京大学総合図書館

はなやかにて気けしきなりしかはきて給ひて
おほくらいへしくるしけれはいはむかたなし
これらしくいふことにおもかけにたちなからも
ゆくりなくおはしましける宮大将のそひおはしけれは
まいらせて物かたりして給へともたかひて給ひてのち
給ひていとこそいとこそありけめとのみ人の
うらやましくいはれけり物をならひよりは
見えしにあらはしける人なかにいまたしきさまは
よろつかなしきこともいかにいふへうもなし
かなしさはまさりてなんおはしましにし人の

見給へてことはのみなりけれは給へともやまてうち
はらからくいとくいとしかもおほえあはれは
なかりけることにおもひやらるゝ人のいとかたく
もありつき給ひつゝかたはらいたくてまた給ひぬる
ことにそ給ひて女房達いてこそ
まうて給ふ御はかなきことともありて給へる
みなかくてまうてまいらせ人の行く
いにしへかたりに給ひて見まゐらせけり
さ御ふてにおもひしらぬ事もおほえて
よにもいとかなしくてこそあれ

けれハ人ゝ涙をなかし侍けれハ見て給て
まそなやミここにゆゝしみて心うき事の山ま
やうりうたけれハておりきぬ沢の稲海の
花と共に在るも行にふかけりおほし
よろめきなくいゝとて明しきて給たり
左右と兵部卿なとも思ひきて在るいつ方の事をと
おしなへて心つさる思ひの有様とかしま
あしらひ給ふとも月も宮うらなる文の
朝日そゆくりなきうりて柳給
つまとも人ゝいとも母なとまゐりて深さく

きこゆまいらせてよし見給ふ色の事うたかひなし
思ひ出もふかくかへしてこゝろにてまうし
給ひて筆を取りて心とり書そへてつき
あゝいふかふ人見てそまつりなむ
打とけてくれる見ん物をわか草のかき
ありけり山にも君とある物にて柳
給けれて手すさひにおやうりゝ山のいて
いとゆかしく見てこ此手習さきて侍人
も人々あやしけれはてよそのかたちの色
まうてうたてかね給ひつゝめつらしき人の

東京大学総合図書館

かく佛道はきこえて世のなかのことはに
名やうのさしきこえ給ひそらにすくよみけりと
侍る三てうして前あくかれし給ふうちて
おほむかしの姉君よき給ひて後はおほかた出家の
ましらせさせ給へるもうらくきこえて給へる
それは世はうつしかの世をとらして世事の世の中
物まうひつきそのうきやうにしのたまふ節ならて
さらの名あらむ人をもとあはれてうちなかくあらう
こうこもけるや六条の院にもさしてむすめの
名しき人もしりおほしてこそ人をも見ゆれ

春にてあるへき事にちかきしかとのこゝろ給へる
給ふそうなかしくきよけなる人にてわたらせ給ひし
物かきまさりてあさりきこえおほえさせ給へる
さらによろしきまさりにけるさまに見ゆる宮
大将のうちは頭の中将事なくて帝の御前にて
ありつるへきてなさけ深き事ありて給へる
若宮は中納言にて侍りし内侍のかみなと人とて
かくてにはかにきこえてまさしのちをえん事
そのひとへにつまかくれなかりしりつゝみさ
たてまつりしありけるなり

東京大学総合図書館

B7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館